

平田忠道氏ご講演録(約 35 分)(平成 26 年 8 月 9 日「戦争体験を聞くつどい」)

### <戦争は人生を一変させる狂気の出来事>

私の 84 年の人生を振り返り、アメリカと日本との戦争において体験しましたことは、忘れようとしても忘れられません。昭和 20 年 8 月 15 日、太平洋戦争が終わって、来年は 70 年を迎えます。戦争は人生を一変させる狂気の出来事だと思います。

私ども一家は、昭和 20 年 4 月頃、東京麻布から広島に転居いたしました。転居後わずか 4 か月で被爆し、あ那时的地獄のような惨事は、70 年近くたった今日でも生々しく甦り、私の脳裏から消え去ることはありません。私の母は当時 39 歳、弟は 4 歳、二人とも原爆で殺されました。この世とは思えない地獄のような惨状の中、私が二人を必死になって探し求めたことをお話いたします。

### <東京大空襲を経て広島へ>

その前に、原爆が投下される前のわが家のことについてお話させていただきます。昭和 20 年 3 月末まで、私たち家族は東京麻布に住んでおりました。父はその前年 7 月、大正海上火災の広島支店長として単身赴任していました。家族は昭和 20 年の 3 月～4 月に広島に転居しました。

広島に転居する前、3 月 10 日の東京大空襲に私たちは遭遇しました。そのとき自宅は焼失を逃れましたが、その後 5 月 25 日の空襲で自宅は焼失してしまいました。広島に転居後、4 月 10 日頃ですが、父に召集令状が来てしまい、四国の善通寺師団に入営。その後、朝鮮の京城に派兵されました。私は麻布中学から広島高師付属中学 3 年に転入学し、直ちに広島郊外の下祇園の三菱精機広島製作所祇園工場へ勤労働員にまいりました。二番目の弟は同校 1 年に入学し、賀茂郡原村に農作業に出かけていたので、弟は原爆には遭遇しませんでした。妹は国民学校 4 年に転入学と同時に比婆郡西城町に学童疎開しました。したがって、わが家では、母と弟、私の 3 人で過ごしていました。

その後、4 月 20 日頃、父が乗った列車が朝鮮に赴くため、広島駅を通過するということを知り、母と私は駅へ駆けつけました。列車から降りてきた父と改札口を挟んで母は話していましたが、このときが父と母の最後の別れとなってしまいました。父と別れた後、涙を流しながら悲しみにじっと耐えていた母の姿は、私の脳裏から離れません。

### <自宅の強制疎開>

7 月初め、国泰寺町の自宅が強制疎開にかかってしまいました。今では考えられないことですが、何の保障もなく、10 日以内に引っ越せという話になったの

です。勤労働員が休みの日、私が4歳の弟と2階で本を読んでおりますと、階下から母が駆け上がってきて、

「忠道ちゃん、大変よ！ここらへん強制疎開だって。どうしよう！10日以内にすぐ立ち退けて。10日経てばすぐ壊すんだって！」

と言いながら、

「ぐずぐずしてもしょうがない。今から空き家探しに行ってくるからね。」

と言い残して、出かけていったことを覚えております。私は勤労働員を休むわけにいかず、母はそれから毎日家探しに奔走し、時には4歳の弟を連れて出かけていましたが、なかなか適当な家が見つかりませんでした。

「今日も数件、空き家があったけれど、路地の奥など、空襲にあったら逃げられないところだったので諦めたのよ。」

と、たとえ空襲になっても、身体だけでも逃げられそうな所を懸命に探していました。

近所の家屋の取り壊しが始まり、強制疎開の期限が2日後に迫った日、私が勤労働員を休んで荷物を整理していましたら、母が帰ってきました。

「忠道ちゃん！あったわ、あったわ！」

「よかったな、お母さん！どこに？」

「それがね、富士見町なの。運がよくて、ちょうどそのお宅の前を通ったとき、玄関が開いていてね、その奥に荷造りした荷物が置いてあったの。それで聞いてみたら、そのお宅は田舎に疎開するんですって。事情を話したら、荷物をすぐ持っていらっしゃいと言ってくれたの。」

こうして期限の二日前にやっと見つかりましたが、危ないところでした。時には4歳の弟を連れての空き家探しは、言葉では言い尽くせない大変な苦労だったと思います。富士見町の家は、道路も比較的広く、道路を隔てて防空壕もあり、母は空襲があっても逃げられると思ったのでしょう。わずかな荷物を乳母車で運び、引っ越ししましたが、その傍らでは、家がどんどんロープで引き倒され、砂塵がもうもうと舞い上がり、目も開けていられない状況でした。私はこの富士見町の家から、広島北、横川から17キロくらい離れた可部町の三菱精機広島製作所の疎開作業に通っておりました。

### <8月6日の記憶>

8月6日のことは今でもはっきり記憶しています。弟の武久が朝早く起きてきて、寝ている私の上に馬乗りになり、

「兄ちゃん！起きなよ！」

と私を起こしにきたのです。そのようなことは、それまで全くなかったことでした。私が出かけるとき玄関で、

「兄ちゃん！行ってらっしゃい。」

と、母と二人で手を振りながら見送ってくれました。それが二人との最後の別れになるとは考えもしませんでした。後から考えますと、虫の知らせがあったのではないかと思います。

朝8時15分ごろ、警戒警報が解除され、これから可部での工場の疎開作業を始めようとしたとき、雲一つない青空に、急にB29の爆音が聞こえました。上空を見るとB29の機影が見えた瞬間、ピカッと強烈な稲妻のような閃光がありました。閃光と同時に私たちは皆、農家の土間に逃げ込み、両手で目や耳を抑えた時、ズドンともものすごい爆発音があり、爆風が耳元を横切っていました。外に出て、広島方面を見ますと、なんと形容してよいのか、猛烈な黒い入道雲のようなものが、むくむくと地面から大空にどンドン広がり、不気味に大きくなっていきました。下のほうの真っ黒な煙のものすごさは言葉では表現できません。

可部線が不通になり、広島市は大変なことになっているという情報が入ってきました。このとき先生はいなかったので、皆で相談してそれぞれの自宅方向でグループを組み、徒歩で一路自宅に向かいました。途中、市内から顔や皮膚などに火傷をした大勢の人々が列をなして逃げてくるではありませんか。市内に近づくにしがって火傷もひどく、衣類も焼かれ、太田川の堤防や河原にうずくまって動かない大勢の人々がいました。

私たちの眼前には、地面から黒ずんだ煙が激しく吹きあがり、逃げてきた人たちから、

「広島は全滅だ、横川からは市内に入れない」

と聞きましたので、太田川の対岸から牛田方面に向かいました。牛田近くの陸軍工兵隊の兵舎の前まで来ますと、全身に火傷を負った兵士が木陰に運ばれ、

「水くれ！水くれ！」

と悲痛な叫び声をあげていました。傍らの兵士が、

「水を飲むと死ぬぞ。火傷に水はだめだ、我慢せよ！」

と励ましていましたが、今もその悲痛な叫び声は私の耳元から離れません。その火傷を負った兵士は、当然その状態では生きていられるわけではないのです。だから、水を少しでもあげたらよかったのではないかと今でも思うのです。

またその近くで私たちは兵隊たちから銃剣を突きつけられ、市内に行くことを阻止されましたが、押し問答の末、強行突破しました。しかしその先は火災がひどく、市内に入ることはできませんでした。

仕方なく迂回して、山陽本線の太田川の鉄橋を渡り、横川駅構内に夕方たど

り着きました。鉄橋を渡るとき、枕木がまだ燃えていたり、炭のようになっていたり、汽車は不通なのに後方から「ポーッ、ポーッ」と私たちを急がすような不気味な汽笛が聞こえました。私たちは、

「怖いな、また汽笛が鳴ったぞ」

と言いながら渡りましたが、怖さで身震いしたことは覚えております。

横川駅構内では機関車や貨車、石炭車などが燃えていて猛烈に熱く、ここから市内に入ることを諦めました。夕方になって泊るところを探さねばならず、勤労働員に行っていた下祇園の三菱精機広島製作所の工場に立ち寄りしましたが、工場の建物は窓ガラスが吹き飛んでおり、ひっそりとして人影は見かけませんでした。もしも人がいれば、ここで一晩過ごそうとみんなで話しましたが、それは不可能でした。そこで、可部線を少し北のほうに行ったところの緑井というところに、級友の家があったのでそこを訪ねました。

「今晚、君のところに泊めてくれないか」

「いいよ、こんなときだもの、お互いさまだよ」

と、5、6人が一晩お世話になりました。

そのお宅は家屋の被害はほとんどなく、近所の人々は炊き出しに大わらわになっていました。私は家族のことを心配していました。級友の家族の方々に励ましをいただき、元気づけられました。ほとんど眠れませんでした。自宅はもうだめだろう、母や弟は今どうしているのだろうと考えましたが、いなくなっているとは思いませんでした。なお、一晩お世話になったそのお宅のご家族の方々には、大変感謝しております。

### <地獄図の広島市内へ>

翌8月7日、私たちは可部線沿いに徒歩で横川から市内に入りました。市内は燃え尽きていて、廃墟と化していました。最初に目に入った焼死体は、横川駅近くの電車で、焼けた荷馬車と馬の死骸の上に寄りかかった馬方の赤黒く焼けた焼死体でした。真っ黒に焼けた市電の中には、熱風の衝撃からか、一方に叩きつけられた真っ黒な乗客の無残な焼死体が折り重なっていました。道路には男女の区別もつかない焼死体が多く散乱していました。兵隊だけは靴とかゲートルが多少残っていたので区別が付きましたが、そのほかは性別もわからず、とにかくひどい状況でした。廃墟となった家屋、焼失家屋の下には無数の逃げられなかった犠牲者がいたことでしょう。この世とは思えない、地獄のような惨状に言葉はありませんでした。

自宅に向かう途中、産業奨励館、現在の原爆ドームも破壊され、その近くの相生橋も欄干が崩れていました。焼死体を担架で運んでいた救急隊を手伝いな

がら、黒焦げの焼死体が散乱している中を紙屋町などを経て、富士見町の自宅にたどり着きました。一帯が焼け野原でしたが、石の門柱と防火水槽で自宅を確認できました。爆心地から大体 1,100 メートルから 1,200 メートルの距離だったと思います。そこで生き残った人がいたので、近隣の様子を聞くと、家屋が上から倒壊してきて、猛火が襲ってきたとのことでした。その人はつぶれた家屋から這い出して助かったそうです。方々から、「助けてくれ」との叫び声や悲鳴が聞こえたけれども、私の家からは何も聞こえなかったとのことでした。そこにいたのはその人だけで、ほかの人は見かけませんでした。

私はもしかしたら母と弟はどこかに出かけていたのかもしれないと思い、焼け跡で夕方まで待ちましたが、二人は帰ってきませんでした。勤労働員の同じグループで比治山に自宅があった山岸君が、

「肉親がいないなら、家に来いよ」

と言ってくれました。そこで私は防火水槽の壁に焼けた瓦の破片で、

「お母さん、僕は無事です。明日 10 時にここに来るからいてください。」

と書いて、彼の家に行きました。しかし、山岸君の家も爆風で大破していて、家の中には入れず、向かいの比治山公園の銅像の台座の上で寝ましたが、ほとんど眠れませんでした。

翌 8 月 8 日、近くの救護所で罹災証明書の交付を受け、自宅焼け跡に戻って母と弟を待ちましたが、いつまでたっても現れませんでした。そこで八丁堀にあった父の会社（大正海上火災）を訪ねると、そこも全焼していて、多くの社員が通勤途上で被爆したらしく、連絡が取れないとのことでした。私は社宅が牛田丹土区にあると聞き、そこを訪ねました。そこは焼失は免れたものの、屋根瓦は吹き飛び、ガラスも室内に散乱しており、とても住める状況ではありませんでした。しかし、8 日からはそこを拠点にして母と弟を探すことにしました。当時、食料は証明書があれば各地の救護所で乾パンをいただくことができました。喉の渇きは、破壊された水道管から流れ出た水でしのぎました。

### <母と弟を探して>

私はもしかしたら母が弟を連れてひょっこり現れるのではないかと毎日のように待ち続けました。その間、負傷者収容所などに収容されているのではと思い、約 1 か月間探し回りました。千田町の日本赤十字社やその他の収容所でも、受付に収容者の名前が書いてある紙がありましたが、わずかな人数で実際の収容者人数とあっていませんでした。紙に書いてある名前は本人から確認できた人で、ほかには火傷がひどく聞けなかった人たちなので、中に入って確認なさいと言われました。

どの収容所でも中に入りますと、床の上に皆意識がなかったのでしょうか、髪の毛も焼かれ、全身大やけどの多くの女性たちが、大やけどの子どもや乳飲み子をしっかりと抱きしめて横たわっていました。所内はしーんとして、わが子を抱きしめて離さない情景には言葉もなく、この世とは思えない悲惨極まる状況でした。私は母と弟もどこかの収容所にいるのではと思い、似た母子を一人一人確認して回りましたが、いませんでした。

ある収容所を訪ねたとき、入り口に真っ黒に全身を焼かれた男性が筵に巻かれて横たわっていました。意識がなかったのに、急にふらふら起き上がって歩こうとするのです。受付にいた兵士が、

「だめだ！寝てなければ！」

と怒鳴って押し倒して横にしましたが、私は今でもその兵士の怒鳴り声が忘れられず、当時の悲しい状況は鮮明に記憶しています。

真夏でしたので、市内は腐乱した焼死体の異臭が充満し、特に死臭の強かったところは幾体もの焼死体が放置され、全焼した浅野図書館の中には死体が山積みされ、強烈な地獄図でした。また相生橋の下の元安川には焼死体が累々で、その中に馬や牛の死骸が浮いていたり、流されたりしていました。

8月6日から数日後、相生橋付近を歩いていましたら、橋の傍らに大きな穴が掘られ、救急隊の人々が木材を燃やしながら、鳶口などで周辺にあった焼死体を投げ入れて、茶毘に付しているのを見ました。翌日、そこを通りますと、多数の焼けた屋根瓦が並べられ、その上に、一握りずつの遺骨が置いてありました。そして立札があり、そこには

「無名者の遺骨、お心当たりの方はお持ち帰りください」

と書いてありました。

その後、付属中学1年の弟喜彦が賀茂郡原村から帰ってきて、自宅焼け跡で久しぶりに会いました。その頃私は、母と弟が建物の下敷きになって逃げられなかったのではと考え、喜彦と焼け跡を少しずつ片づけましたけれども、焼けた屋根瓦や漆喰や壁土などが多く、瓦を多少取り除いただけで、はかどりませんでした。

ある日、己斐の近くの南三条町のあるお宅を訪ねました。このお宅は畑の中の一軒家で、母が大事にしていた衣類などを疎開させてあった所でしたが、家は消失を逃れたものの、爆風で大破していました。行李に入った母の着物なども、雨が降ったため、びしょぬれでしみがついて、ひどい状況でした。このお宅を訪ねる途中、市内から己斐に向かう道路沿いにも多くの焼死体が焼けたトタン板や筵を被せられていました。当時、近隣の農家から勤労奉仕隊として多

くの人たちが市内の強制疎開作業に動員されていたため、肉親の名前を書いたのぼりを持って郊外から来ている人が、そのトタン板や箆をめぐりながら肉親捜しをしていました。私も、もしかしたら二人が放置されているのではと思いつながら、一人一人確認したり、通行人の中にそれらしき女性や子ども連れを見かけますと、振り向いたりしましたが、全て無駄でした。

その途中、畑の中の小道でひとりぼっちでうつ伏せに倒れていた4歳くらいの男の子の焼死体がありました。服を焼かれ、全身やけどで、かわいそうに恐らく一人で遊んでいたのでしょう。私の弟と似ていましたので、どきっとしたことがありました。戦争とはいえ、何の罪もない多くの善良な一般市民が、一発の原子爆弾により全く逃げることもできず無差別に変わり果てて、無残な犠牲になりました。幼い子どもたちは何のためにこの世に生を受けたのでしょうか。小さな生命を奪う残忍さに怒りと悲しみで言葉もありませんでした。

その後、私たちは父の郷里徳島の親戚に応援を頼もうと考えました。その前に、私は学童疎開していた妹の千枝に、それまでの状況を知らせるため、9月初めごろ比婆郡西城町のお寺を訪ねました。妹に何と言っているのか、私は言葉がなかったのですが、妹には、

「お母さんと武久はいないよ」

とこれだけ話すのが精いっぱいでしたが、妹は予想していたのか、うなずくばかりでした。

その晩は先生のご好意で、妹の同級生たちと一緒に本堂に泊まりました。当時の混乱した状況では妹を徳島に連れて行くのは無理でしたので、先生に当方の事情を話して、しばらく妹を預かってもらうことにしました。

### <壊滅の広島から徳島へ>

私は弟の喜彦と9月6日頃、広島から徳島に向かいました。山陽本線の岡山までは有蓋貨車で、真ん中の扉が開けっ放しで、転落しないように鉄棒が渡してあるだけで、満員でした。その頃岡山までは6時間以上かかったと思います。岡山経由、宇野より連絡船で高松に渡り、高松から徳島行きの終列車で叔母の家がある吉成駅に深夜着きました。駅の外は真っ暗なので、待合室で復員兵からいただいた鮭の缶詰で空腹を癒しながら夜を明かしました。

叔母の家には、弟が幼少のころ、父と訪ねたことがあるだけで、微かな記憶を頼りにやっとの思いでたどり着きました。早朝6時頃訪ねますと、家中驚きの声があがりました。叔母や親戚は広島へ何度も安否確認の電報を打ったというのですが、反応がなかったため、全員が死亡したのではないかと心配していたそうです。

その後、父が朝鮮から復員し、広島で妹を引き取り、9月20頃徳島に帰ってきました。私たちから1か月の行動を聞いた父は直ちに広島へ引き返していきました。私たち兄弟も同行しようとしたのですが、「お前たちは疲れているから休んでいるように」と止められました。

### <父、二人の遺骨を発見>

広島へ行った父が自宅焼け跡を掘り起こして、母と弟の骨を発見しました。父の話では、中庭と思われる場所に、大きさから大人と子どもとわかる骨と、弟が着用していたベルトのバックルがそばにあったので、おそらく一緒にいたものと考えられるとのことでした。当時、骨壺などはありませんでしたので、焼けた海苔の缶に二人の遺骨を入れて持ち帰ってきました。遺骨を発見したときの心境を父は私たちには話しませんでした。大変な悲しみと衝撃に耐えている姿がありました。

二人は原子爆弾でどんな悲惨な目にあったのか、確認のしようがありませんが、一瞬の閃光と熱風で即死したのか、あるいは建物が倒壊してきて下敷きになり、這い出すこともできないうちに、猛火が襲ってきて逃げられなかったのか。いずれにしても想像しただけで大変なショックで痛恨の極みでした。私はそれまで二人はどこかで生きていたのだと信じていただけに、もう会えないとわかったとき、苦勞をかけた母に少しでも親孝行しておけばよかった、「兄ちゃん、遊んで」と私が勤労働員から帰宅するといつも飛びついてきた弟と、もっとも遊んであげればよかったと反省しきりで、言葉では表現できない悲しみに打たれ、どうしても諦めきれませんでした。

母39歳、弟4歳、二人ともあまりにも若すぎる早い別れでした。母は苦勞をいとわぬ大変な働き者でした。また母は、戦争が早く終わることを願っていて、終戦になればそれまでの苦勞は報われ、一家で楽しい生活を送ることができると夢見ていましたが、叶えられず、さぞ無念だったでしょう。私は母が子どもたちに極めて優しく愛情深く接してくれたことに大変感謝しています。

### <「過ちは繰り返させぬから」を胸に刻んで>

原爆投下の広島では15万人、長崎では7万人、無抵抗の一般市民が一瞬にして犠牲になり、8月15日に戦争は終わりました。せめて10日早く降伏していれば、広島、長崎の悲劇は回避され、多くの犠牲者は出なかったのです。広島、長崎の原爆慰霊碑の碑文、「安らかに眠ってください 過ちは繰り返させぬから」を胸に刻み、人間同士が殺し合う戦争と、核兵器、原爆の悲惨さを二度と繰り返すことのないよういつまでも平和な世界が実現することを願っております。



戦後も 70 年、戦争体験者も残り少なくなってきましたが、戦争がいかに不幸、残虐な出来事であったか次世代の人々に語り継ぐことが大切なことと思っております。